今日の説教箇所：マルコによる福音書12章1～12節

- 1:イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。

- 6:まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。

- 10:聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、／わたしたちの目には不思議に見える。』」彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

イザヤ書5章1～7節

- 1:わたしは歌おう、わたしの愛する者のために　そのぶどう畑の愛の歌を。わたしの愛する者は、肥沃な丘に　ぶどう畑を持っていた。よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り　良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ　わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。わたしがぶどう畑のためになすべきことで　何か、しなかったことがまだあるというのか。わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに　なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。さあ、お前たちに告げよう　わたしがこのぶどう畑をどうするか。囲いを取り払い、焼かれるにまかせ　石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ　わたしはこれを見捨てる。枝は刈り込まれず　耕されることもなく　茨やおどろが生い茂るであろう。雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑　主が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに　見よ、流血（ミスパハ）。正義（ツェダカ）を待っておられたのに　見よ、叫喚（ツェアカ）。

9月4日　マルコによる福音書12章1～12節　今日の説教から
説教題：「とんでもないことをしてしまった」

今日の聖書箇所ではぶどう園のたとえ話が語られていますが、これはイザヤ書5章の1～7節の記事を前提にしたものです。裏面の聖書箇所の下にその個所を記していますので、一緒にご覧ください。この箇所では、神様がイスラエルの民の不信仰に対して大きな怒りをもっていることが記されています。当時、イスラエルの民は異邦人の行っていた占いを好み、偶像崇拝を行い、お金や地位を愛して神様をないがしろにしていました。ここで「丁寧に世話をしたのに酸っぱいぶどうが実った」、つまり「愛を注いだのに信仰という実を十分につけなかった」ことが問題になっています。そのぶどうは滅びるままに捨て置かれる、見捨てると書かれており、つまりはイスラエルの民であっても正しい信仰をもたなければ神様から見捨てられると書いてあるのです。

このイザヤ書のたとえ話は、今日の個所においてさらにイスラエルの民を追い詰めることになります。マタイ福音書12章で、イエスさまは目の前のユダヤ人たち、特に祭司長、律法学者、長老たちをぶどう園の農夫達としてたとえました。ぶどう園の主人が収穫のために僕を送っても、農夫たちは送り返してしまいます。主人は「わたしの息子なら敬ってくれるだろう」と考え、息子を収穫のために送るのですが、その結果農夫たちによって無残に殺されてしまいます。農夫たちは息子を殺すことで、ぶどう園のすべてを手に入れようと画策したのです。

ただ実際の所、跡取り息子を殺したところでそのぶどう園が自分たちのものになるという道理は、当時の常識をもってもあり得ない事でした。ただの反逆者である農夫たちを、ぶどう園の主人がそのままにしておくはずもありません。たとえ話の中では、彼ら農夫たちは無残に殺されてしまい、他の農夫にぶどう園が任されることになります。

少し考えればわかることです。神様に逆らってでも自分の道理によってこの世を支配しようと考えることがどれほど愚かなことなのか。イエス様のもとに来ていた祭司長、律法学者、長老たちは、「あなたたちが行っているのは、これほど愚かなことなのだ」という事実がイエス様によって突きつけられたのです。

イエス様を十字架につけて「当たり前」にふるまうユダヤ人たちは、ぶどう園の主人に見捨てられる農夫たちのように、神様から見捨てられて後悔することでしょう。いえ、後悔するのであればイエス様を受け入れる余地があるのでしょう。例えばパウロのように、初代の教会にも、イエス様を信じてキリスト者となったユダヤ人が確かにいました。しかし、ユダヤ人の多くがイエス様のことを受け入れることが出来ませんでした。自分の正しさを疑わず、自分の行いを後悔しないからこそ、彼らはイエス様を受け入れることが出来ませんでした。

私たちは、後悔することが出来ているでしょうか。自分の行いが正しいと、自分の考えが正しいと、そのような思いで心が頑なになってしまっていないでしょうか。その先に待ち受けるのは、神様から見捨てられるという恐ろしい結末です。どのような失敗も、取り戻せないものは殆どありません。ただ、自分の思いを神さまよりも優先して、それに気づかずにこの人生を終えてしまえば、それはもう「取り返しのつかない」ことになるのでしょう。

私たちは、自分たちがそうならないように、兄弟姉妹が、隣人たちがそうならないようにと宣教の使命が与えられています。その使命の重大さをかみしめながら、今週一週間の、これからの歩みを進めていきましょう。